

【特集にあたって】

## 新しい国際交流の発信を目指して

——「国際交流学部」発足記念——

Toward A New International Exchange Era : An Essay to commemorate the birth of CSJ

赤 木 攻\*

AKAGI Osamu

キーワード：国際交流学部 (Faculty of Cross-Cultural Studies in Japan (CSJ)), グローバリゼーション・プレッシャー (Pressure from Globalization), 和魂地球人 (Globally Minded Japanese), 柔らかい観光学 (Study of Soft Tourism)

平成 25 年 4 月、大阪観光大学に「国際交流学部」が新しく発足した。昨今の小規模大学、とりわけ私立大学を取り巻く諸状況はきわめて厳しく、その発足は難産であったが、新しい国際交流の発信を目指してささやかではあるが鋭意活動を開始している。ここでは、この新学部「国際交流学部 (CSJ, Cross-Cultural Studies in Japan)」の趣旨を説明するとともに、その目指すところを考察することにした。

### 1. 「国際交流学部」の目的—「和魂地球人」の養成—

「国際交流学部」という名称は、学部の目的を十分に説明できていないくらいがある。一見平凡な名称に落ち着いたが、我々が目指す新しい学部の内容を適切に表す言葉がなかなか見つけられなかったためである。「グローバル日本学部」などといった例を含めて様々な名称が提案され検討されたが、採用には到らなかった。紆余曲折を経て、最終的にはこのきわめて普通の名称に収まった経緯がある。つまり、新しい学部がこれまでの学部にはない方向性や特質を擁していたため、十分にカバーできる名称が見つからなかったといってもいいだろう。それだけに、この「国際交流学部」という名称だけでは、この新学部を捉えることは難しい。

この「国際交流学部」構想の基本は、もちろん 21 世

紀の今日に対する認識が背景となっている。それを、端的に言い表すとしたら、「グローバリゼーション」というターム以外にないであろう。だれしもが認めるように、21 世紀は、モノ・ヒト・カネ・情報が大量にこれまでにない速度で地球上を往来する時代である。その代表は、情報であろう。今日のインターネットに代表される情報の発達、まさに 15 世紀のグーテンベルグの活版印刷術の発明以来の大事件であり、現今は第 2 の情報革命の真ただ中にある。また、航空機の発達もヒトとモノの流れを急速に高めた。一体世界で 1 日に何便の飛行機が飛んでいるのか、おそらくは計算できないぐらいの便数ではなからうか。

こうしたグローバリゼーション現象を貫くのは、「関係性の増加、強化」であり、「一様性の進行」であろう。少し前までは、遠い外国の地で生じたことが我々の生活と関係を持ち、ひいては影響を受けることは少なかった。しかし、今や地球の片隅で起きたことが、時をおかずに、影響してくる。タイで大洪水が発生し工場が被害を受け操業ストップとなると、日本への部品の供給ができなくなり、日本の製造工場も操業ストップに追い込まれる。コーヒー栽培の国々が天候不順などで不作となると、世界中でコーヒー価格が上昇する。また、コンビニという小売形態が世界的にポピュラーとなり、飲料水はペットボトル入りが普及してしまった。政治や社会問題

\*大阪観光大学国際交流学部

も、一昔前まで、国内で対応できていたことがら、今では国際的協議を必要とする場合が増加してきている。そうした、グローバリゼーションが内包する「一様性の進行」や「一様性を求める動き」を「グローバリゼーション・プレッシャー」と呼ぶとすれば、21世紀を生きる私たちはこのプレッシャーに対応していかなければならない。

なぜならば、現実の人間社会はことのほか多様性に満ちているからである。言語をはじめ、宗教や慣習はきわめて多様である。そうした多様性は一様化を求める「グローバリゼーション・プレッシャー」と対立する。とりわけ、ものの考え方や生き方は多様であり、相互理解が困難な場合が多く、対立が先鋭化する。しかし、共存共生は21世紀の人類に課せられた最優先課題であり、私たちは対話・交流を通じて対立を超え相互理解を深め普遍性＝地球益を求めていかなければならない。

その対話・交流において、私たちは気後れすることがあってはならない。日本人や日本社会が有する固有性の中から普遍性をもつと考えられるものを、世界に示していかなければならない。周囲を海に囲まれた湿潤な気候の中で長い時間をかけて熟成された日本の文化には、人類が共生共存するための知恵が数多くあるにちがいない。とかく、日本文化は独自性が高く、つまり固有性が強く、普遍性に乏しいといわれがちであるが、決してそうではない。「もったいない」といった考え方のように、日本人のものの考え方や生き方には地球益に通ずるものが多い。それらを深く学び、自信を持って外に向かって発信していくことが重要である。日本人のものの考え方や生き方を理解し、国境を超えた“地球益”を視野に外と対話・交流できる人間を、私は「和魂地球人」と命名する。

大阪観光大学国際交流学部の目的は、この「和魂地球人」の育成に他ならない。大阪観光大学学則には、以上のような趣旨を次のような表現にまとめている。

国際交流学部は、日本学に関する諸分野の教育・研究と発信ツールとしての高度な英語力の涵養を基礎に置き、地球益を重んじる課題解決能力を備えた有為の人間「和魂地球人」を育成し、併せて文化の固有性と普遍性をめぐる研究の推進により交流学理論の構築を行うことを目的とする。[大阪観光大学学則第1条の3]

大方は、「国際交流学部」という名称を付した学部は

多く存在すると思われるであろうが、実際にはほとんどない。おそらくは、フェリス女学院大学のみであろう。ただ、「国際交流」を冠した学科はきわめて多い。これらの学部や学科も、ほとんどが、グローバリゼーションが進行する21世紀社会をにらみ「共生」をテーマにした人材の養成を目的にしている。しかし、本国際交流学部は、目的は同じであるが、学修の対象地域とその姿勢において決定的に異なっている。従来の学部や学科が、主として世界（外国）の諸地域を対象としているのに対し、我々は日本を対象としている。また、彼らの姿勢が受信型であるのに対し、我々は発信型であるともいえよう。そこには、「国際交流」概念に対する新しい我々の考えが反映されている。つまり、我々の学部は、日本に軸足を置いた発信型国際交流を目指している唯一の学部であるといえよう。

## 2. 斬新な英語教育法の開発－CSJ メソッド－

カリキュラムは日本学が中心となるが、あわせて最大の力を入れているのが英語教育である。日本文化を発信するには、発信ツールが必要である。そのツールとしての英語学習を重視している。大学における英語教育についてはこれまでも改革が叫ばれてきたが、本格的に実践されたケースはきわめて少ない。本学部では、定評の高い英会話教材「Speak Natural スピーク・ナチュラル」を開発した池田和弘准教授が大学での英語教育のために独自に作成した「CSJ メソッド」を採用している。その大きな特徴は「学習者にやさしい」ところにある。学習者の事前学習などの負担を可能な限り減らし、授業にしっかり取り組めば力がついてくるプログラムである。また、難易度を計算した自然なレベル設定も魅力である。文法事項の説明は最小限に抑え、意味と音を中心に「聞く・話す・読む・書く」の総合力を鍛え上げていく最先端英語教育メソッドといえよう。

加えて、母語あつての外国語学習という原理に立っており、国語教育にも力を入れたカリキュラムを用意している[参考までに、日本学、英語教育を中心としたカリキュラム編成の基本を図示したディプロマポリシーを添付する]。

## 3. 日本文化の発信－もうひとつの「観光学」－

大阪観光大学は、これまで観光学部のみからなる単科大学であった。そこへ、2つ目の学部として「国際交流

学部」を設置したが、そこに議論がなかったわけではない。多くの方から、「なぜ観光大学に国際交流学部なのか」という質問をいただいた。ミスマッチではないかという意見であった。

私が用意した答えは、以下のとおりである。

まず了解されねばならないのは、日本における観光学そのものがまだ歴史が浅く発展段階にあり、それなりにまとまった体系を確立していないという点である。観光という事象を多角的かつ学際的に研究するのが観光学であり、より具体的には観光地(観光資源)、観光旅行、観光産業(観光経営)、観光政策などが研究対象になるという説明が、観光学への一般的見解であろう。その周辺には旅行代理店やホテルなどに関する実際的で多様な知識も観光学の範疇に含まれるであろう。いずれにしても、観光学は総合学であり、まだその確かな姿を描く段階に来ていないといわざるを得ない。

以上のような、いわば名所旧跡などを見て回る観光を対象とする学に対して、私はもうひとつの「観光学」を提唱したい。それは、端的に言えば、「文化の発信」である。とりわけ、その民族や地域に固有な文化を探求し発信する学である。日本に即していえば、日本文化を他の国々の方々に理解してもらうことである。日本各地の名所旧跡の形や姿を見るだけではなく、そこに込まれている精神や意味を観て、紹介・説明することである。また、日本人の生活や文芸作品などを深く観察考究し、そ

こに秘められた価値観や意味を取り出し、紹介・説明することである。さらに言えば、そのように探り出したり取り出したものを他の文化と衝きあわせたり、比較・対話・交流する作業も入ってくる。

こうしたもうひとつの「観光学」こそ、この新設の「国際交流学部」が担う観光学であり、「柔らかい(ソフト)観光学」と呼べる性格を備えている。とすれば、既設の観光学部が担う一般的観光学は、「固い(ハード)観光学」であるといえよう。この「固い観光学」と「柔らかい観光学」の二つの観光学が揃ってはじめて観光学といえるのではなからうか。二つの観光学は互いを刺激しながら切磋琢磨していくことが望まれる。

大阪観光大学は、2013年4月に「国際交流学部」を新設し、既設の観光学部とのシナジー効果を発揮すべく、新しいスタートを切ったといえよう。そのスタートを記念して、特集「国際交流学部発足記念 日本学の発信のために」を組ませていただいた。まだまだ半年を経たばかりで、教員は慣れない仕事に戸惑いながらも、ほとんどの時間を教育に費やしている。そんな中で、自己紹介もかねて著わした論文とオーストラリア語学研修の報告文を所収させていただくことにした。皆さまからご叱正をいただくとともに、新学部へのご理解とご支援をお願いする次第である。

